報告

要介護高齢者の社会への参加ニーズとその特性

田場由紀[1]　大湾明美[1]　伊牟田ゆかり[1]　糸数仁美[1]　呉地祥友里[2]　野口美和子[2]

【研究目的】本研究では、社会への参加を社会システムからの参加と個別のつながりからの参加に区別し、要介護高齢者の社会への参加ニーズとその特性を導くことを目的とする。

【研究方法】研究参加者はひとり暮らし要介護高齢者31名であった。データの収集は、半構造化した面接調査を実施、調査項目は①基本情報、②社会への参加ニーズについて、③過去から現在までの社会への参加状況、④介護状況であった。データの分析は、逐語録から作成した個票に基づいて、回答内容を原文で抜き出しキーセンテンス化、キーセンテンスの類似を集めサブカテゴリー化した。これらサブカテゴリーについて、調査項目ごとの分析と、ニーズの特性を検討するために事例ごとの分析を行った。

倫理的配慮は、沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会で承認を得た。

【結果および考察】要介護高齢者の主観的な社会への参加ニーズは、『社会システムからの参加ニーズ』と『個別のつながりからの参加ニーズ』があった。要介護高齢者の社会への参加ニーズの特性として、過去から現在の社会への参加状況の影響が語られており、2種類のニーズが互いに関連した個別的で多様なニーズであることが示唆された。

社会への参加ニーズの組み合わせは、『双方群』、『社会システムのみ群』、『個別のつながりのみ群』、『社会への参加ニーズなし群』の４タイプがあった。社会への参加ニーズについての質問には、半数以上の高齢者が「歳なのでやりたいことは何もない」と回答し、面接の経過で参加ニーズが挙がってきたという特徴があったことから、要介護状態での社会への参加ニーズは表出されにくいニーズと考えられた。要介護高齢者の社会への参加を促進する看護職の役割として、過去の社会への参加状況から把握するアセスメント力をつけ、主観的な参加ニーズを捉え、個別的な支援を検討する必要性が示唆された。

キーワード：要介護高齢者　参加ニーズ　つながり

Ⅰ．はじめに

長い老年期を健康で生きがいをもって過ごすために、すべての人が地域とつながりを持つ社会づくりがめざされている[1)]。そこで、これまで社会への参加対象から外れざるを得なかった要介護高齢者の社会への参加と、参加を促進する看護職の役割について検討が必要と考える。

参加の場である社会について、「社会システム」という捉え方と、「個々人の間の相互作用（以下、「個別のつながり」とする）」という捉え方がある[2)]。前者は、国や自治体、会社、家族など組織化、公式化した集団を単位とし、個人はその組織や集団に求められる役割を果たす。一方後者は、個別のつながりとその相互作用の結果が社会であるという立場で、個人が他者とかかわりを持つことで社会が構成される。要介護高齢者の場合、社会システムからの離脱が余儀なくされるが、生活してきた歴史の中で、様々な他者と相互作用を繰り返してきた経験から、選択的に個別のつながりを形成していることを考えると、要介護高齢者の社会への参加は、社会システムからの参加よりも個別のつながりからの参加が相対的に拡大すると考える。つまり、要介護高齢者の社会への参加促進を検討するには、個別のつながりからの参加に焦点を当てることが必要と考える。

[1] 沖縄県立看護大学
[2] 元沖縄県立看護大学

これまで、高齢者の社会への参加に関する報告[3)~5)]では、国が展開する参加支援についての効果や課題が明らかになっているが、高齢者はどのような参加を望んでいるのか。ニーズについて、Bradshaw[6)]は対象者の立場から捉えた主観的ニーズと、専門職などの立場から捉えた客観的ニーズに分類している。社会福祉や介護サービスの領域では、包括的なアセスメントのために主観的ニーズが軽視できず、またソーシャルワークのクライエント中心の原則からもその重要性が強調されている[7)]。

以上のことから、要介護高齢者の社会への参加を検討するには、社会への参加ニーズを主観的ニーズから把握することが必要と考える。そこで、本研究では、社会への参加を社会システムからの参加と個別のつながりからの参加に区別し、要介護高齢者の社会への参加ニーズとその特性を導くことを目的とする。

【用語の定義】

社会システムからの参加：組織や集団に所属し、社会への参加を達成することとする。例えば、仕事を通して経済活動に参加する、地域活動を通して地域での役割を担う、家事や家業を通して家族での役割を担うこととする。また、公的に組織されたサークルや教室に参加することを含む。

個別のつながりからの参加：家族や親族の中の個々人、および隣人、知人、友人などのインフォーマルな関係者とのかかわりを通して社会への参加を達成することとする。例えば具体的な他者と生活の中でともに時間を過ごし楽しむこと、支援しあうことなどとする。その中には個人の集まりであるモアイへの参加を含む。

社会への参加ニーズ：現在の生活でやりたいこと、やりたくてもできないこと、できないけどやりたいこととして語られた、社会システムあるいは個別のつながりからの参加希望や要望のこととする。

Ⅱ．研究方法

1．研究参加者（表1）

研究参加者は、11か所の高齢者サービス提供機関から紹介を受け、同意の得られたひとり暮らし要介護高齢者31名であった。年齢は前期高齢者10名、後期高齢者10名、85歳以上の超高齢者11名で、平均年齢は80.16（±7.76）歳であった。性別は女性21名、男性10名であった。

2．研究方法

1）データの収集

データの収集は、半構造化した面接調査で、面接時間は60分～90分、場所は研究参加者宅で実施した。調査の内容は調査票に記載し、研究参加者の了解をえてICレコーダーに録音、逐語録を作成した。さらに調査票と逐語録から、研究参加者ごとの個票を作成した。調査項目は、基本情報、社会への参加ニーズについて、過去から現在までの社会への参加状況について、現在の生活で必要な介護の状況についてであった。

2）データの分析

データの分析は、調査項目ごとの分析と事例ごとの分析を行った。共通の分析として、逐語録から調査項目ごとに回答内容を原文で抜き出し、原文の意味内容が変化しないようキーセンテンス化した。キーセンテンスの類似したものを集め、サブカテゴリー化し、個票を作成した。調査項目ごとの分析では、個票からサブカテゴリー化されたものを質問項目ごとにあつめ、カテゴリー化した。さらにカテゴリーから目的に照らして命名を導いた。

事例ごとの分析では、社会への参加ニーズについて、調査項目ごとの分析で導かれたカテゴリーの有無を整理し、タイプ分類をした。なお、データの分析については、老年保健看護の教員、大学院生、大学院修了生で構成する老年保健看護研究会で討議、合意を得た。

表１　研究参加者の概要

ID	年齢	性別	要介護度	主要病名	家族構成			ひとり暮らしの状況	
					結婚歴	子の有無	子との距離*	期間	きっかけ
1	85	女	要介護３	脊柱管狭窄症	なし	—	—	48年	実家からの独立
2	80	女	要支援２	子宮ガン術後後遺症	あり	なし	—	16年	配偶者の死亡
3	80	女	要介護４	関節リウマチ	あり	あり	遠方	６年	親の死亡
4	88	女	要介護４	腰椎圧迫骨折	あり	あり	近隣	７年	別居
5	74	男	要介護２	慢性閉塞性肺疾患	あり	あり	近隣	30年以上	別居
6	86	女	要支援１	変形性膝関節症	あり	あり	遠方	25年	離婚
7	70	女	要介護１	スティフマン症候群	あり	あり	近隣	12年	配偶者の死亡
8	93	女	要支援２	変形性膝関節症	あり	なし	—	５年	配偶者の死亡
9	91	女	要支援２	変形性膝関節症	あり	あり	遠方	30年以上	子の独立
10	84	男	要介護１	慢性閉塞性肺疾患	あり	なし	—	４年	きょうだいの死亡
11	68	男	要介護１	脳梗塞後遺症	あり	あり	近隣	８年	配偶者の死亡
12	74	男	要介護２	大腿骨骨頭壊死	あり	あり	近隣	７年	子の独立
13	87	女	要介護１	脊柱管狭窄症	あり	あり	近隣	10年	子の独立
14	86	女	要支援２	変形性膝関節症	あり	なし	—	３年	配偶者の入院
15	82	女	要介護１	腰椎圧迫骨折	あり	あり	近隣	15年	配偶者の死亡
16	75	男	要支援２	腰痛症	あり	なし	—	28年	配偶者の死亡
17	68	男	要支援１	パーキンソン症候群	あり	あり	近隣	７年	配偶者の死亡
18	81	女	要支援２	腰痛症	あり	あり	近隣	12年	配偶者の施設入所
19	74	男	要支援２	パーキンソン症候群	あり	あり	近隣	30年	離婚
20	80	男	要介護２	統合失調症	あり	あり	遠方	４年	配偶者の施設入所
21	88	女	要介護１	変形性膝関節症	あり	あり	近隣	12年	離婚
22	93	女	要介護２	変形性膝関節症	あり	あり	近隣	９年	離婚
23	89	女	要介護２	変形性膝関節症	あり	あり	近隣	６年	配偶者の死亡
24	74	女	要介護２	腰椎圧迫骨折	なし	—	—	50年以上	実家からの独立
25	68	女	要支援２	関節リウマチ	あり	あり	近隣	10年	配偶者の死亡
26	88	女	要介護３	右大腿骨骨折術後	あり	あり	遠方	13年	配偶者の死亡
27	78	男	要介護２	頸椎後縦靭帯骨化症	あり	あり	近隣	８年	子の独立
28	83	女	要介護３	変形性膝関節症	あり	あり	近隣	８年	配偶者の入院
29	74	女	要支援１	関節リウマチ	あり	あり	近隣	25年	子の独立
30	76	女	要介護１	肥満性低換気症候群	あり	なし	—	10年	配偶者の死亡
31	68	男	要介護２	低血糖性脳障害	あり	あり	近隣	１年	子の入院

*子との距離は子のひとりでも島内居住の場合は近隣、それ以外は遠方とした

本文中には、サブカテゴリーを《　》、カテゴリーを【　】で表記した。さらにカテゴリーから導かれた命名は『　』で表記した。

3）倫理的配慮

対象へは事前にサービス担当者を通して訪問の同意を得、調査者が説明を行ったうえで研究参加の同意が得られたものを研究参加者とした。なお、本研究は沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会で承認を得た。

Ⅲ．結　果

1．要介護高齢者の社会への参加ニーズ

（表2）

社会への参加ニーズは、『社会システムからの参加ニーズ』として【農業や仕事がしたい】【社会活動に出かけたい】があり、『個別のつながりからの参加ニーズ』として、【出かけて家族と過ごす機会を増やしたい】【なじみの人と外出して楽しみたい】【知人に迷惑をかけない】【家族に迷惑をかけない】【家族のためにできることをしたい】【誰かといたい】【死んだあとに何かを残しておきたい】という多様なニーズがあった。

2．要介護高齢者の社会への参加状況

1）過去から現在までの社会への参加状況

（仕事との関係）

仕事と過去の生活との関係では、55のサブカテゴリーと9のカテゴリーが抽出された。

9のカテゴリーについて、【定年まで働いた】【定年後も働いた】【仕事を頑張ってきた】【健康が仕事を支えてくれた】【家族のために働いてきた】【仕事をしながら家族の手伝いもした】から、『自己と他者のための仕事の継続』、【病気で仕事をやめた】【家族のために仕事をやめた】から、『自己と他者の理由による退職』、【仕事を通して様々なつきあいが生まれた】から『仕事による個別のつながり』がそれぞれ導かれた。

仕事と現在の生活との関係では、34のサブカテゴリーと8のカテゴリーが抽出された。

8のカテゴリーについて、【今でもできる仕事を続けている】から『生活のための仕事の継続』、【仕事を通しての知人との付き合いが続いている】【仕事を通しての知人が今でも来てくれる】【知人によって畑が守られている】から『仕事による個別のつながりの継続』、【仕事を通しての知人に誘われるが出かけられない】【仕事を通しての知人との付き合いはない】【畑が引き継がれず寂しい】から『仕事による個別のつながりの希薄化』がそれぞれ導かれた。

このように、仕事を通した社会システムからの参加は、個別のつながりからの参加と関連があった。仕事の有無が個別のつながりの継続および中断に関連している場合と、仕事を喪失しても、個別のつながりを残し継続している場合があった。

2）過去から現在までの社会への参加状況（家族との関係）

家族と過去の生活との関係では、67のサブカテゴリーと11のカテゴリーが抽出された。

11のカテゴリーについて、【家族の生活を支えてきた】【家族の介護を担ってきた】【家族と協力して仕事をしてきた】【家族に迷惑をかけない生活をしてきた】【家族や親せきとの外出を楽しんだ】【家族の価値を受け継いだ】という『家族への参加貢献』と、【病気で家族の生活を支えられなくなった】【家族に世話された】【家族とは疎遠になっていた】【家族を亡くした】【家族をつくってこなかった】という『家族のほころび』が導かれた。

家族と現在の生活との関係では、135のサブカテゴリーと18のカテゴリーが抽出された。

18のカテゴリーについて、【家族との外出を楽しんでいる】【家族に世話をされている】【家族に世話をされて感謝している】【家族から訪問されている】【家族に気遣われている】【家族から

表２　社会への参加ニーズ

	カテゴリー	サブカテゴリー
『社会システムからの参加ニーズ』	【農業や仕事がしたい】	《歩けないのであきらめているが、歩ければ仕事をしたい》
		《仕事がしたいができない》
		《農業をしたいができない》
		《仕事をしたいが歩けないのでできない》
		《仕事をしたいが歩けないのでできない》
		《楽しかった仕事がしたいが、障害がありできない》
		《仕事はしたいがあきらめている》
		《体力があれば畑仕事がしたい》
		《畑の手入れをしたいが歩けないのでできない》
		《歩けるなら、畑仕事をしたい》
	【社会活動に出かけたい】	《歩けるなら、ボランティア活動を続けたい》
		《人の集まる催し物にでかけ、地域の雰囲気を感じたい》
		《今でも趣味の教室に通いたいが行けない》
		《腰痛のため、地域の催し物に行けない》
		《神様のために伝道したい》
『個別のつながりからの参加ニーズ』	【出かけて家族と過ごす機会を増やしたい】	《実家に帰ってみたいができない》
		《懐かしい東京に息子と出かけたい》
		《県外の姉妹に会いに孫と出かけたい》
		《（島外の）子ども達と自由に会いたい》
		《親戚宅に誘われるが足が悪く行けない》
	【なじみの人と外出して楽しみたい】	《病気をする前のように友人と出かけたい》
		《目が見えれば友達と遊びに出かけたい》
		《なじみの友人とグラウンドゴルフを楽しみたい》
		《お客さんのところにでかけて、おしゃべりを楽しみたい》
		《老人会の集まりに行きたい》
		《誘われて外出したい》
		《仕事仲間と外出して座談話をしたい》
		《親戚のように付き合ってきたお客さんに会いに出かけたい》
		《友人と外出し遊びたいが、迷惑をかけたくないので出かけられない》
		《友人と外出したいが、痛みで楽しめない》
	【知人に迷惑をかけない】	《知人に迷惑をかけないよう、調理ができるようになりたい》
		《人に迷惑をかけたくない》
		《（知人の）足手まといになることはしない》
		《これ以上、知人に迷惑をかけないうちに逝きたい》
	【家族に迷惑をかけない】	《寝たきりにならないうちに逝きたい》
		《（島外の）子ども達に迷惑をかけないよう健康に気をつけている》
		《寝たきりになったら施設に入るしかない》
		《寝たきりになったら姪に従う》
	【家族のためにできることをしたい】	《家族や親族のためにできることをしたい》
		《孫が結婚が見られるまで生きていたい》
		《体の痛みがなければ、子や孫のためにやりたいことがある》
		《亡くした息子の供養がしたい》
	【誰かといたい】	《子に介護を拒否されヘルパーを依頼したが子に世話をして欲しい》
		《なじみの人からの声かけはありがたい》
		《ひとりで家にいるのは寂しく、誰かとおしゃべりしたい》
		《誰かと話したい》
		《毎日誰かと一緒に過ごしたいが、歩けないのでできない》
		《ひとりでおしゃべりの相手もなく、楽しみがない》
		《ひとりで寂しい》
		《患者会に参加したいができない》
	【死んだあとに何かを残しておきたい】	《歳なので身辺整理をして譲りたい》
		《死んだ後に残せるような歌をつくりたい》

問：現在やりたいことは何ですか。

慕われている】【家族や親せきを頼りにしている】【子や孫の存在に幸せを感じている】【引き継がれた家族の価値を認めている】【つながりを保ち強めたい】【家族を気遣っている】という『家族とのつながりを感じる』、【家族に迷惑をかけないで生活したい】【家族に仕事を引き継ぐことができなかった】【家族を頼れない】【家族とは疎遠になっている】【家族とのつながりが弱い】【家族に対する後悔がある】【ひとりで寂しい】という『家族のつながりの希薄化』が導かれた。

このように、家族のなかで役割を担えないことが、一人一人の家族との個別のつながりを希薄にしている場合と、役割を喪失しながらも、個別のつながりを楽しみ、感謝しながら継続している場合があった。

3）過去から現在までの社会への参加状況（地域活動や隣人・知人・友人との関係）

地域活動やなじみの人と過去の生活との関係では、45のサブカテゴリーと9のカテゴリーが抽出された。

9のカテゴリーについて、【自宅でなじみの人と楽しんだ】【好きな趣味や地域活動をなじみの人と楽しんだ】【なじみの人を増やしてきた】【新しい地域活動に参加した】【できることを地域に貢献してきた】という、『地域活動への参加貢献やなじみの人との楽しみ』と、【なじみの人とのつきあいは途絶えていた】【なじみの人はなくなった】【地域活動より生活を優先した】【地域活動はしなかった】という『地域活動への不参加となじみの人の喪失』が導かれた。

地域活動やなじみの人と現在の生活との関係では、101のサブカテゴリーと12のカテゴリーが抽出された。12のカテゴリーについて、【なじみの人との外出を楽しんでいる】【なじみの人の訪問を楽しんでいる】【なじみの人と支え合っている】【なじみの人には用事を頼める】【なじみの人を増やしている】【今でも地域活動に参加している】【今でもできることを地域に貢献している】という『地域活動やなじみの人とのつながりを感じる』、【なじみの人とのつきあいが途絶えている】【なじみの人とのつきあいが減っている】【つきあうようなじみの人はいない】【なじみの人はなくなった】【地域活動ができなくなっている】という『地域活動やなじみの人とのつながりの希薄化』が導かれた。

このように、地域活動を通した社会システムからの参加は、個別のつながりからの参加と関連があった。地域活動の参加の有無が個別のつながりの継続および中断に関連している場合と、地域活動を喪失しても、個別のつながりを残し継続している場合があった。

3．要介護高齢者の社会への参加ニーズのタイプ（表3）

事例ごとに社会への参加ニーズの回答内容について、『社会システムからの参加ニーズ』と『個別のつながりからの参加ニーズ』の有無を検討した。

社会への参加ニーズのタイプとして、社会システムからの参加ニーズと個別のつながりからの参加ニーズの『双方群』、『社会システムのみ群』、『個別のつながりのみ群』、『社会への参加ニーズなし群』があった。

1）『双方群』の例：

78歳男性で、要介護2である。島外の子や孫は行事のたびに帰省し【家族から訪問されている】が、近隣のきょうだいは、歳のため外出ができず【（近くても）家族を頼れない】。そのため本人は日常的に通所介護で過ごす。漁師として働いたが【病気で（要介護状態となり）仕事をやめた】。漁師仲間との座談話は継続していたが、外出の支援がえられなくなり【なじみの人とのつき合いが減っている】。社会への参加ニーズとして《仕事をしたいが歩けないのでできない》という【仕事

がしたい】と語っており、個別のつながりからの参加ニーズとして《仕事仲間と外出して（以前のように）座談話を楽しみたい》という【なじみの人と外出して楽しみたい】と回答していた。

２）『社会システムのみ群』の例：

75歳の男性で、要支援２である。離婚歴があり、妻や子とは連絡が途絶え【家族とは疎遠になっていた】。退職後、県外から島に移り住み、子に果物を送るなど連絡をとるようになったが、【病気のため（果物も送れず）子とのつながりがもてない】。社会への参加ニーズとして、《仕事はしたいがあきらめている》という【仕事がしたい】と回答していた。

３）『個別のつながりのみ群』の例：

70歳の女性で、要介護１である。子は県内に居住、【（毎日通ってくれる）家族に世話をされて感謝している】。要介護状態になる直前まで、仕事や地域活動で友人を多く作ってきたが、【（病気で）なじみの人とのつき合いが減っている】。社会への参加ニーズとして、《（しばらくあっていない）

表３　要介護高齢者の社会への参加ニーズのタイプ

ID	社会システムからの参加ニーズ	個別のつながりからの参加ニーズ	社会への参加ニーズのタイプ
1	○	○	『双方群』
12	○	○	
15	○	○	
18	○	○	
26	○	○	
27	○	○	
31	○	○	
2	○	—	『社会システムのみ群』
4	○	—	
8	○	—	
11	○	—	
14	○	—	
16	○	—	
22	○	—	
5	—	○	『個別のつながりのみ群』
6	—	○	
7	—	○	
9	—	○	
10	—	○	
13	—	○	
19	—	○	
20	—	○	
21	—	○	
23	—	○	
24	—	○	
28	—	○	
29	—	○	
30	—	○	
3	—	—	『社会への参加ニーズなし群』
17	—	—	
25	—	—	

県外の姉妹に会いに孫と出かけたい》という【出かけて家族と過ごす機会をふやしたい】、《（食事会など）病気をする前のように友人と出かけたい》という【なじみの人と外出を楽しみたい】、《（ひとりで外出できないが）ひとりで家にいるのは寂しく、誰かとお喋りしたい》という【誰かといたい】と回答していた。

Ⅳ．考　察

１．要介護高齢者の社会への参加ニーズの特性

本研究において、要介護高齢者は、過去に社会システムからの参加を通して、個別のつながりからの参加を達成し、現在では、社会システムからの参加が困難になったことで個別のつながりを喪失している場合と、個別のつながりを維持している場合があった。このことから、過去の生活で多様な社会システムに参加しながら個別のつながりを育み、要介護状態になることで、社会システムからの参加が困難になっても、自己を中心とした参加可能な社会を形成していると捉えられる。

社会心理学の分野で北山[9]は、日本人の自己とは他者と結びついた社会的ユニットの構成要素であり、他者とのつながりを確認することが自己の満足につながると報告している。今回、要介護高齢者の社会への参加ニーズとして、『社会システムからの参加ニーズ』と『個別のつながりからの参加ニーズ』が導かれたが、これらのニーズは、これまでの社会への参加状況とその中で育んできた個別のつながりを背景とし、互いに関連していると推察され、個別的で多様なニーズであることが示唆された。

２．要介護高齢者の社会への参加を促進する看護職の役割

社会への参加ニーズの組み合わせは、『双方群』、『社会システムのみ群』、『個別のつながりのみ群』、『社会への参加ニーズなし群』の４タイプがあった。また、社会への参加ニーズについての質問に対し、半数以上の高齢者が「歳なのでやりたいことは何もない」と最初に回答し、面接の経過で参加ニーズがあがってきたという特徴があった。

Bradshaw[6]のニーズ分類法による主観的ニーズは、表明されないFeltニーズと表明されたExpressedニーズに区別され、表明されない理由は、サービスの対象と考えない、表明したくない、気づいていないことが挙げられている。また、高齢者の主観的ニーズについては、日本の文化的影響によるニーズの複雑さや把握の困難さが指摘されている[10]。

社会システムから期待される役割を担うことができない要介護状態では、社会への参加ニーズは表明されにくくなると考えられた。しかし、現在の社会への参加状況から、社会システムからの参加が困難でも、個別のつながりからの参加を継続している者があったことから、要介護高齢者の社会への参加は、個別のつながりからの参加ニーズを充足することで促進できる可能性があった。そのためには、要介護高齢者の社会への参加ニーズの特性を考慮し、過去の社会への参加状況からニーズを捉えるアセスメント力が必要と考えられた。

また、高齢者の主観的ニーズに基づいた地域ケアのあり方と効果に着目した報告[11]では、要介護高齢者の主観的ニーズの充足を支援することを通して、本人の健康や満足への貢献だけでなく、関係者に影響をあたえ、地域づくりに寄与することが示唆されている。つまり、多様で個別的な社会への参加ニーズを充足する支援は、国のめざす地域づくりにつながる可能性が考えられる。したがって、要介護高齢者の主観的な社会への参加ニーズを捉え、個別的に支援を検討する必要性が示唆された。

３．本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、認知症高齢者を含めた社会への参加を検討できていないことである。また、分析の視点として、性差を考慮していないこと、農

村地域や都市地域からの研究協力者を得たにも関わらず、地域性を考慮していないことがあげられる。

今後の課題は、性差、地域性を考慮して、社会システムからの参加ニーズと個別のつながりからの参加ニーズとの関連を、個別の事例ごとに検討することである。また、社会への参加ニーズを充足する支援を看護実践に取り入れ、人生の質の向上をめざす具体的な取り組みの方策について明らかにすることである。

Ⅴ．結　論

要介護高齢者の社会への参加ニーズとして、『社会システムからの参加ニーズ』に『個別のつながりからの参加ニーズ』を加える必要性が示唆された。

要介護高齢者の社会への参加ニーズの特性として、過去の社会への参加状況と関連があり、個別的で多様なニーズであることが示唆された。

要介護高齢者の社会への参加を促進する看護職の役割として、過去の社会への参加状況から把握するアセスメント力をつけ、主観的な参加ニーズを捉え、個別的な支援を検討する必要性が示唆された。

謝　辞

本論文は第一著者の平成22年度沖縄県立看護大学大学院博士後期課程の博士論文の一部を加筆修正したものである。

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆さまに深く感謝申し上げます。

文　献

１）厚生労働省（2008）：安心と希望の介護ビジョン，http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/11/s1121-8.html（2011年２月７日現在）.

２）Georg Simmel: Grundfragen der soziologie (Individuum und Gesellschaft)(1917)/居安正(2004)：社会学の根本問題（個人と社会），(初版)，世界思想社，京都

３）岡本秀明（2009)：地域高齢者のプロダクティブな活動への関与とwell-beingの関連，日本公衆衛生雑誌，56(10)，713-723.

４）島貫秀樹，本田春彦，伊藤常久，河西敏幸，高戸仁郎，坂本譲，犬塚剛，伊藤弓月，荒山直子，植木章三，芳賀博（2007)：地域在宅高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康およびQOLの関係，日本公衆衛生雑誌，54(11)，749-759.

５）水戸美津子（2000)：高齢者の活動状況および生活意識に見る地域差，老年社会学，22(1)，72-82.

６）Bradshaw.J (1972)：A taxonomy of social need. McLachlan、G．(ed)，Problems and progress in medical care，essays on current research，7th series，Oxford University Press，London，70-82.

７）F P Biestek S J：The casework relationship（1957)/尾崎新，福田俊子，原田和幸訳(1996)：ケースワークの原則援助関係を形成する技法，(初版)，誠信書房，東京.

８）内閣府（2009)：高齢者の社会への参加に関する意識調査結果（概要版)，http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h20/sougou/gaiyo/index.html（2011年１月27日現在).

９）北山忍（2003)：自己と感情－文化心理学による問いかけ－(初版)，共立出版，東京.

10）沖中由美（2007)：ケア提供者に対する施設入所高齢者の隠された主張－もっとできる自分を知ってほしい－，日本看護研究学会雑誌，30(4)，45-52.

11）大湾明美，佐久川政吉，大川嶺子，下地幸子，富本溥，根原憲永（2003)：離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究－「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題－，沖縄県立看護大学紀要，4，37-47.

Journal Of Okinawa Prefectural College of Nursing No.13 March 2012.

Needs for Social Participation among the Elderly Requiring Care and Characteristics of the Needs

Yuki Taba. DNSc, Akemi Ohwan. DHSc, Yukari Imuta. PHN,
Hitomi Itokazu. MNSc, Sayuri Kurechi. MNSc, Miwako Noguchi. DHSc

Abstract

[Research Objective] This study aims to classify social participation into 2 categories-participation through a social system and participation through personal connections-and to deduce needs for social participation among the elderly requiring care as well as characteristics of the needs.

[Research Methods] Research Methods are 31 elders requiring care who live alone. The data were collected through semi-structured interviews which contain inquiring items about (1) basic information, (2) needs for social participation, (3) hitherto living conditions, and (4) caring situation. The data analysis is based on individual data that were made out of verbatim data from the interviews; and sub-categorized key sentences. Based on the sub-categories, we analyzed each inquiring item to acquire a broad picture of the research outcome. Additionally, we analyzed each case to examine characteristics of the needs.

The Research Ethic Board of Okinawa Prefectural College of Nursing has approved this research.

[Results and Discussion] The needs for social participation among the elderly requiring care were to be divided into "needs for social participation through a social system" and "needs for social participation through personal connections." As characteristics of participation needs among the elderly requiring care, the interviews talked about their social participations from the past to the present, so that it was suggested that, the needs are diversified as a result of interaction between the 2 kinds of needs.

There are 4 characteristics and types of the needs for social participation; 4 combinations are groups that have "the needs both through a social system and personal connections," "the needs through a social system," "the needs through personal connections" and "no needs." For questions about needs for social participation, more than a half of the interviewees responded that "I have nothing I want to do since I am too old." However, the needs were found in the process of the interviews. Such responses also come from "a group of those who do not have needs for social participation," so that we can assume that the needs for social participation among those requiring care are ones that are not well expressed. As for the nursing roles, it is suggested that nurses need to acquire assessment ability to grasp participation needs from elders' past conditions of social participation, grasp subjective participation needs, and consider individual support in order to provide support for social participation among the elderly requiring care.

Key ward: Elderly Requiring Care, Participation Needs, Connection